

浜名恵美教授退官記念号



2013年12月 タージ・マハルにて

浜名恵美教授 略歴 研究業績

【略歴】

- 1981年4月 立教女学院短期大学英語科講師
1983年4月 同上 助教授
1985年10月～1986年9月 連合王国オックスフォード大学英文学部研修生
1986年10月 立教女学院短期大学英語科助教授
1990年4月 同上 教授
1993年4月～1994年3月 アメリカ合衆国ブラウン大学英文学部客員研究員
1994年4月 立教女学院短期大学英語科教授
2001年4月 筑波大学現代語現代文化学系教授
2004年4月 国立大学法人筑波大学学院人文社会科学系研究科教授
2011年8月～2015年3月 同上 外国語センター長
2011年10月 国立大学法人筑波大学人文社会系教授（改組）
2015年4月 国立大学法人筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター長
2016年3月 国立大学法人筑波大学人文社会系教授退職

【研究業績一覧】

著書

- 1 *The Cambridge Guide to the Worlds of Shakespeare* (分担著) (“Quotation Marks: Japanese”), Cambridge University Press, 2015
- 2 『シェイクスピア プリズム——英国ルネサンスから現代へ』(分担著) (『シェイクスピア、女性、演劇』)、金星堂、2013
- 3 『文化と文化をつなぐ——シェイクスピアから現代アジア演劇まで』(単著)、筑波大学出版会、2012
- 4 『テキストたちの旅程——移動と変容の中の文学』(分担著) (『現代(日本)演劇における移動と変容——平田オリザ作『ソウル市民三部作』、野田秀樹作『The Bee』、三谷幸喜作『笑の大学』に関する考察)、花書院、2008

- 5 『ことばと文化のシェイクスピア』(分担著) (「シェイクスピアの異文化パフォーマンス——蜷川幸雄演出『タイタス・アンドロニカス』、宮城聡演出『ク・ナウカで夢幻的な『オセロー』』、野村萬斎主演『ハムレット』に関する考察)、早稲田大学出版部、2007
- 6 『言葉の絆：藤原保明博士還暦記念論集』(分担著) (「異文化演劇の21世紀——多様性をとおしての共生と共創のために」)、開拓社、2006
- 7 『ジェンダーの驚き——シェイクスピアとジェンダー』(単著)、日本図書センター、2004
- 8 『アメリカナイゼーション——静かに進行するアメリカの文化支配』(共編著)、研究社、2004
- 9 『シェイクスピア大事典』(共編著) (「VII章 批評と研究」編集と序文、「IX章 21世紀のシェイクスピア」編集)、日本図書センター、2002
- 10 『グローバル・コミュニケーション論——対立から対話へ』(分担著) (「ジェンダーと国際関係」)、ナカニシヤ出版、2002
- 11 『英語圏文学—国家・文化・記憶をめぐるフォーラム』(分担著) (「処女王の驚き (The Wonder of the Virgin Queen) ——初期ヴァージニア植民地言説をとおして」)、人文書院、2002
- 12 *Hot Questrists After the English Renaissance: Essays on Shakespeare and His Contemporaries* (分担著) (“The Wonder of the Virgin Queen: Through Early Colonial Discourse on Virginia”), AMS Press, 2000
- 13 『逸脱の系譜』(分担著) (「爆発するレズビアン・ゲイ文化研究—現代アメリカを中心として」)、研究社、1999
- 14 *Hamlet and Japan* (分担著) (“Whose Body Is It, Anyway?: A Re-Reading of Ophelia”), AMS Press, 1995
- 15 『シェイクスピアの歴史劇』(分担著) (「性の政治学/解釈の政治学——『アントニーとクレオパトラ』を読む」)、研究社、1994
- 16 『シェイクスピア批評の現在』(分担著) (「ばら戦争は終わったのか? ——『リチャード三世』の記号空間分析」)、研究社、1993

学術論文

- 1 “Multilingual Performance of Shakespeare Worldwide: Multilingual *King Lear*, Directed by Tadashi Suzuki as a Case Study,” *Theatre International*, Vol. VII Essays on Theory & Praxis of World Drama, Shakespeare Special Number (Kolkata:

- Avantgarde Press) (2014).
- 2 “A Report on Globe to Globe 2012: Shakespeare’s 37 Plays in 37 Languages,” 筑波大学外国語センター紀要『外国語教育論集』、第 34 号 (2013) (『英語学論説資料』、論説資料保存会、第 47 号 (2015) 収録)
 - 3 “This Is, and Is Not, Shakespeare: A Japanese-Korean Transformation of *Othello*,” *Alicante Journal of English Studies* (University of Alicante, Spain), Vol.25 (2012)
 - 4 “Contemporary Japanese Responses to Shakespeare: Problems and Possibilities,” *Theatre International: East-West Perspectives on Theatre*, Vol.V Essays on the Theory and Praxis of World Drama, Shakespeare Number (Kolkata, India) (2012)
 - 5 “*Othello* in Japanese *Mugen*-Noh Style with Elements of Korean Shamanism: A Creative Subversion,” 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝編』、第 59 卷 (2011)
 - 6 “What’s the Right Thing to Do About English Studies in the Age of Global English?: Performing Japanese Plays in English,” *Journal of English and American Studies* (Ewha Institute of English and American Studies, South Korea), Vol. 9 (2010)
 - 7 「シェイクスピアと異文化コミュニケーション：序説」, 筑波大学現代語・現代文化学系筑波英学展望の会紀要『筑波英学展望』、22 号 (2003)
 - 8 「シェイクスピアとジェンダー：序説」, 筑波大学現代語・現代文化学系紀要『言語文化論集』、57 号 (2001)
 - 9 「ポルノグラフィの新しい政治学」, 『シアターアーツ』(国際演劇評論家協会日本センター)、7 卷 (1997)
 - 10 “Let Women’s Voices Be Heard! — A Feminist Re-Vision of Ophelia,” *Shakespeare Studies* (日本シェイクスピア協会)、Vol.26 (1990)
 - 11 “A Stylistic Approach to the Use of Tense-Mixing in Shakespeare’s *Venus and Adonis*,” 『英文学研究』(日本英文学会)、58 卷 2 号 (1980) 日本英文学会第 3 回新人賞受賞論文

その他の活動

- 1 グローバルコミュニケーション教育センター開設記念シンポジウム「グローバルコミュニケーション教育センターの挑戦」、筑波大学、2015 年 6 月 19 日
- 2 招待講演 早稲田大学演劇博物館主催 2015 年度シェイクスピア祭演劇講座「現代日本シェイクスピア上演の面白さ——世界シェイクスピア上演の立場から——」、早稲田大学、2015 年 5 月 15 日

- 3 招待講演 “A Kabuki Version of *Twelfth Night* Directed by Yukio Ninagawa Reconsidered in Terms of Transversal Poetics,” International Conference on William Shakespeare and Kuvempu, Karnataka, India, 2015 年 4 月 23 日
- 4 国際シンポジウム, “Transversal Poetics from Shakespeare Theater to Contemporary Performing Arts and Film,” 外国語センター主催学術・文化振興公開シンポジウム、2014 年 11 月 8 日
- 5 招待講演 「シェイクスピアの面白さ——超言語的想像力、超言語的实践に注目すると——」、日本シェイクスピア協会・日本英文学会共催 2014 年度シェイクスピア祭（開催校：学習院大学）、2014 年 4 月 19 日
- 6 Keynote Speech, International Conference on Literature, Language and Communication: An Essential Trident, at Amity University, Lucknow, India, 2013 年 12 月 9 日

受賞

福原賞（2004、福原記念英米文学研究助成基金、出版助成、国内）
日本英文学会第 3 回新人賞（1980、国内）

浜名先生の思い出

吉原 ゆかり

私は、1992年山梨英和短期大学で開催された第31回シェイクスピア学会において、浜名先生が「ナショナリズムとフェミニズム——『ヘンリー六世・第1部』におけるジャンヌ・ダルク表象の問題」を発表なさったとき、幸運にも聴講させていただいております。当時においてすでに、浜名先生は学会の研究動向を牽引する、メガ・スターでいらっしゃいました。聴衆があまりにも多く、追加の椅子が運び込まれ、それも通路に収まりきれず、立ち見が出たほどでした。浜名先生の海外研究休暇直後のご発表ではなかったのかと記憶いたします。シェイクスピア『ヘンリー六世・第1部』は、イングランドのナショナリズム高揚と関係の深い作品です。浜名先生のご発表は、その作品において、ジャンヌ・ダルクという外国人であり、女性であり、貴族以外の出自をもつ人物が、どのように表象されているかを精緻に問うものでした。先生のご発表は研究の最前線を提示すると同時に、その後のシェイクスピア研究の発展に大きな影響を与えたものでした。その場に居合わせることで、私はたいへんな幸運者です。

先生のイギリス演劇、シェイクスピア関連のご業績の、ごく一部を紹介させていただきます。「ノンセンスの魔の力——17世紀の風習喜劇」(1981)、「性の政治学/解釈の政治学——『アントニーとクレオパトラ』を読む」(1994)、『ジェンダーの驚き——シェイクスピアとジェンダー』(2004)、“*Intercultural Performance of Shakespeare's Plays*” (2009)、『文化と文化をつなぐ——シェイクスピアから現代アジア演劇まで』(2012)などの研究論文でシェイクスピアや初期近代イングランド演劇研究を牽引なさると同時に、オールティック『ロンドンの見世物』やバクトー『美人——あるいは美の症候』などの翻訳でも、研究者や愛書家を啓発なさってきています。

2000年以來、筑波大学大学院、総合文学領域における浜名先生の教育実践の場と同席させていただくことができたことも、私の幸運です。先生の教育現場における、潤沢な知の蓄積、知的探究心、批判精神、多角的な視角に基づいたご指導につきまして、心からの感謝を捧げさせていただきたく存じます。

浜名先生、先生がご退職なさると、これからどうやっていけばよいのだろう、と不安です。先生が築き上げられてきた学会でのご活動、大学院教育でのご実績を、はなはだ微力ながら継承していければと願っております。また、お芝居ご一緒させていただきます。

格好よく、颯爽と

——浜名先生の思い出——

佐藤 憲一

浜名先生とはじめてお会いしたのは2001年の春であったと記憶している。浜名先生は、わたしが筑波の博士課程に入学するのと同じタイミングで、筑波に着任された。かねてよりさまざまな書物で浜名先生のお名前を目にしていたわたしは、入学早々、やはり筑波にはすごい人がくるものだなあ、と感心したのを覚えている。

しかし、浜名先生は、率直にいて、はじめはなかなか近寄りたがたい先生であった。先生の醸し出す雰囲気や身のこなし、ファッションにいたるまで、あまりにも「きちっ」としており、院生風情がやすやすと話しかけられるような方ではない。比較理論学会や諸先輩方の博士論文公聴会などでは、文字通り、歯に衣着せぬ質問をされる。そしてまた、その質問が的を得ている。これはだめだ。怖い。

人社棟の廊下を、「カツン、カツン」と足音をたてながら歩く浜名先生を、当時のわたしは、畏怖していた。研究者とは、浜名先生のようにあるべきだ。余計な部分や甘えを削ぎ落として、本質と本音で勝負をする。ああいうふうになりたいものだ。格好よい。

そうして、わたしの頭のなかの浜名先生、「想像の浜名先生」を畏怖しつつ、先生ご本人とは適度に距離をおきながら、数年の日々が過ぎていった。そして、そのように浜名先生を心底畏怖していたおかげであろうか、わたしの最終学年には、ついに浜名先生に博士論文の主査をお引き受けいただくという幸運に恵まれたのである。

実際にご指導をうけてみると、想像通りに浜名先生は「直球勝負」で几帳面でいらっしやる。しかし、それとは裏腹に、先生の「直球」を受ける側の立場や気持ちを常に考えてくださる（もっとも、球速を弱めたりはしないが）ことも知った。また、研究における「遊び」の部分を常に大切にされる方であることもわかった。わたしが数年かけて作り上げた「脳内浜名先生」は、こうして博士論文を仕上げてゆく過程で、現実の浜名先生と邂逅し、中和していった。そして、博士論文が仕上がる頃には、わたしの先生に対する畏怖は、たしかで揺るぎのないものになった。浜名先生に主査をお務めいただいたからこそ、さまざまな難局を乗り越えて、博士論文を提出することができたのだと思う。

この春から、人社棟に、あの「カツン、カツン」という足音が響かなくなるのは実に寂しい限りである。しかし、わたしの、そして筑波で浜名先生からのご指導を賜った多くの教え子の脳内には、つねにこの音が響いていることであろう—格好よく、颯爽と。

浜名先生、長い間、ありがとうございました。

私の幸運

笹山 敬輔

私が浜名先生と出会ったのは、大学院に入学してからでした。先生が指導教官になったのは、多分、偶然だったのだと思います。でも、それは私の研究生活において、最大の幸運となりました。

私は、卒業論文から博士論文まで一貫して「演技術」をテーマにしてきました。戯曲中心の演劇研究に疑問を感じていた私は、戯曲を論じなくても演劇研究ができることを示したいという秘かな野望をもっていました。戯曲分析・作品分析をしないことに対しては、卒業論文の中間発表会のと時から博士論文の出版後まで、批判がありました。それでも、私は頑固に自分のやりたいことを貫こうとしてきました。そんな想いを直接、先生に伝えたことはありません。でも、先生は、一度も「戯曲を論じなさい」「作品を分析しなさい」とはおっしゃりませんでした。

先生が味方してくれているのだと思えたこと、そのことで、私は最後まで博士論文を書き終えることができたのだと思います。先生は、私にのびのびと研究させてくださいました。楽しく研究すること、これが先生から学んだことです。でも、私が自由に楽しくしてきたことで、先生をやきもきさせてしまったかもしれません。もっと言えば、大した業績のなかった私が博士論文を提出するにあたっては、先生に「無理」をさせてしまったのではないのでしょうか。

私の研究生活は、先生からの恩を受けっぱなしだったのだと思います。だから、これからは、少しずつ恩返しをさせてください。自分の書いた本をお渡しするとき、先生は心から喜んでくださいます。これからは、物を書き続けることで、先生の学恩に報いたいと思います。

浜名先生、本当にありがとうございました。エネルギー溢れる先生は、これからも国際的に活躍されると思いますが、お身体にはくれぐれもお気を付けください。そして、これからも末永く、見守っていただけますようよろしくお願いいたします。

あなたは研究が好きか

松田 幸子

浜名先生、ご退任おめでとうございます。今、先生のご指導を受けるようになってからのことを思い起こしてみても浮かぶのは、先生の毅然とした在り様です。人社棟6階の廊下、外国語センターの会議室、御茶ノ水の路地、利賀の畦道、デリーのモスク、どこにあっても、先生はまっすぐに背筋を伸ばして、颯爽と歩いておられるので、とても目を惹きます。ただそれは姿だけではなく、研究においても同じなのです。

わたしが修士論文を提出した際、公開発表会で先生が下さったコメントを、わたしは生涯忘れないように思います。英語も、演劇も、取り立てて得意なわけではない私が研究テーマに選んだ題材は、なぜかシェイクスピアの改作で、修士論文は散々な出来栄でした。並み居る先生方が、論文の内容・体裁に対する質問や指摘を浴びせる中で、最も厳しく、それゆえに率直に響いたのは浜名先生の問いかけです。内容面での指摘をいくつかこなした後、先生は「それで、あなたは、この作品が好きなの？」とお尋ねになったのです。その質問に自分がどう答えたのか、実は覚えていません。なぜなら、心底動揺していたからです。論じた作品を、好きなのかどうか。このきわめてシンプルな問いに答えられなかったのは、修士論文において、わたしが作品を深く追求できていなかったからでしょう。

その後、主査となってくださった浜名先生に多大なるご心労をおかけしながら、同じテーマを敷衍して博士論文を提出し、外国語センターの準研究員となり、さらに、現在の大学に勤めるまで、いくつかの論文を書く中で、自分でも不思議なぐらい何度も、その問いに立ち返ってきました。わたしはその作品が好きか。そのことを読み手に伝えることができているか。つまり、作品のおもしろさをしっかりと追求することができているのか。17世紀末から18世紀中頃の演劇というややマイナーな領域で研究を行う中で、浜名先生の率直な問いは、研究発表を行う際の私の指針となっています。あの時先生は、まだ誰も気づいていない作品のおもしろさ、すなわち価値を、読み手に分かりやすく伝えることこそが、文学研究者の役割だと教えてくださったように思うからです。その証拠に、先生のご著書を読んだとき感じるのは、いつも次の二つです。その上演の純粋なおもしろさ、そして、先生の上演に対する直截的なまでの情熱。

多忙な中で、それでも数多くの上演の現場に立ち会い、そのおもしろさを膨大な

メモにして記録し、論文として広く伝える研究者としての在り様を、わたしがいつか真似できるとは到底思えません。ただ、研究対象への情熱を、わたしがその作品を好きであることを、これからもどうにか伝えようとしながら、研究を続けて行きたいと思っています。浜名先生、ご退任おめでとうございます。今後も、どうかよろしくご指導ください。その際、劇場で先生と演劇のおもしろさを共有できればと、心から思っています。

浜名先生の思い出

姚 紅

浜名先生に初めてお会いしたのは、2003年7月筑波大学の大学院推薦入試の日でした。私の論文に対して、先生は研究方法や研究意義から日本語の表現まで細かく質問してくださいました。面接で緊張して何を答えたのかよく覚えていませんが、「いろいろ大変だと思いますが、ぜひ頑張って立派な研究をしてください」という先生の言葉を克明に記憶しています。

2004年4月に入学後、試験時の面接官が大変有名なシェイクスピア研究者の浜名先生であったことを知り、またなんとも不思議なご縁で先生が私の指導教員になることが決まりました。先生は世界のシェイクスピア演劇の上演と異文化コミュニケーションを研究なされています。日本近代文学を研究テーマにし、英米文学や演劇の知識が少ない私は、先生についていけるか不安を感じていました。初回のゼミで、先生から温かい励ましの言葉とご著書『ジェンダーの驚き——シェイクスピアとジェンダー』をいただきました。私は心底感激し、先生のご指導のもとで研究を進めたいと決心しました。

先生のゼミで日本人学生や中国・インド・韓国からの留学生は辞書を調べながら英語の文献を読み、真剣に議論を交わし、文学研究に関わる欧米の最新理論や研究方法を知ることができました。私のまとはずれな質問に先生はいつも根気よく丁寧に解説してくださいました。私にとっての最大な成果といえば、ジェンダー、ポストコロニアル理論やカルチュラル・スタディーズなど幅広い視野から芥川龍之介文学における近代中国の都市空間を分析・考察した博士論文です。

先生のご指導の中で忘れられないのは、ご多忙の中にも関わらず私の論文を一字一句ご丁寧に添削していただいたことです。毎回真っ赤になって戻ってくる論文の原稿用紙に落胆した時もありましたが、私は添削通りに最初から書き直し、勢いもよく先生の研究室に提出に行きました。すると先生はさらに細かく添削、私は新たに書いて提出。2次、3次……と、まるで根競べのように論文を書き続けました。学位審査では、先生から心のこもったご指導を頂戴し、赤ペンで真っ赤になるほど添削して頂いた学位論文の原稿は、今でも大切に保管しています。

必死で先生について過ごした6年間。先生のおかげで人生の中で一番充実した日々を過ごせた6年間。私は教師としての理想の姿を先生の中にみつけたような気がしました。時は流れ、現在博論指導など毎日お忙しい先生をお伺いする機会もなかなかないですが、たくさんの思い出は今も色褪せません。

素敵な先生

セン・ラージ・ラキ

浜名先生に初めてお会いしたのは、私が博士課程一年生だった2010年、大学院の授業でした。その授業は、日本人だけでなく各国の留学生が受講していました。最初に驚いたのは、浜名先生の話す速さでした。まるで、新幹線がフルスピードで私の前を通り過ぎて行くように感じました。私は先生の話聞き逃すまいと必死になりましたが、同時に、その内容の面白さに夢中になり、あっという間に授業は終わってしまいました。「今の自分の日本語力では、先生の講義についていけない、もっと語学力をつけなくては」と考えていたその瞬間に、先生は、私と中国人留学生の姚紅先輩に「あなたたち留学生は、中国やインドと日本との掛け橋なので、これから頑張って」と励ましの言葉をかけて下さったのです。それは私にとってまさに天の声のように聞こえ、今も心の中に響き続けています。

浜名先生の講義や院生の発表後に行われるディスカッションは、いつも充実したものでした。先生は、学生たちの個々の研究を常に気かけ、それに役立つ講義をして下さいました。それに加えて、インドの翻訳に関する研究動向などについても話して下さいました。先生の講義を通して、私自身、インドについて再考することが増えました。

2013年秋、浜名先生と共にインドで開かれた国際学会に参加しました。会議場での先生は、インドの雰囲気ですっかり溶け込んでいるように見えました。日本に比べ、インドでは物事が予定通りに進まず、苛立つことも多いのですが、先生はいつも笑顔で過ごして下さいました。デリーで先生と昼食をとっていた時、お店に並んでいた伝統的なお菓子を見て、「これ、日本の和菓子と似ているわね」と言われました。「私もそう思っていました。インドがもつイメージからは、和菓子と似ているお菓子があるとは思わないですよ。」すると、先生は「きっとお互いを理解する日が来るわよ」と仰いました。この言葉は強く印象に残っています。インドに滞在中は、様々なインドの様子を、日本や他の国々と比較・分析する話題に終始しました。先生とのこのような会話こそが、比較文学の実践授業です。先生と過ごしたインド滞在中では、多くのことを教えていただき、一生忘れられない体験となりました。

そして、2014年の秋にも、先生とご一緒する機会がありました。この時は、それまでの私が知っていた、演劇をご専門とする先生のイメージとは少し違った、と

でも意外な一面を拝見することができました。先生と東京で幾つかのサブカルチャーに接した際、先生は日本のサブカルチャーの成り立ちを丁寧に解説して下さいました。先生の視点はとても新鮮で面白いものでした。この機会を経て、私の日本への理解が一層深まりました。

いつか私も浜名先生のように、笑顔で自然に異文化に近づけたらと思います。いつも、新しい発見へ導いて下さりありがとうございます。心よりお礼申し上げます。

筑波の「青鞮」、浜名先生

江口 真規

大学院に入学して間もない頃、木曜6限のゼミで、青いストッキングを着用された浜名先生が颯爽と教室に入ってこられた姿を今でも覚えている。隣に座っていた受講生のラージさんと、つい目を合わせて「Bluestocking!」と囁き合ったものである。当時の私は研究の何たるかを心得ておらず、夕刻のゼミでは、先輩方の深い洞察を理解できずにうとうとしてしまうことも多かった。しかし、浜名先生の明晰なコメントに目を覚まされる思いで、その洗練されたファッションとともに先生に憧れと尊敬の念を抱くようになった。

その後、大学院では浜名先生の「総合文化研究」の授業を履修し、留学生の先輩方と翻訳理論や近年の文学理論も学習した。突然研究対象を羊に据え、まるで迷羊のように今後の方向性を模索していた私に、先生はアニマル・スタディーズという批評分野があることを紹介してくださった。得てして資料収集に終始してしまい、文学理論の知識と応用に疎く、何十年も前の議論を辿るのに精一杯な私が先生からのご示唆を頂けたことは、何よりも有難いことであった。

浜名先生にはグローバルコミュニケーション教育センター長としてご多忙であった中、幸運にも博士論文の主査をお引き受け頂いた。論文を携えて先生の研究室に伺う際には、何枚もの防弾チョッキを身に着ける心持で面談に臨んだ。そして、研究はただ好きだけではない、どのような意義があるのかを常に考え、一本の「串」のように論全体を貫く筋があることの重要性を何度も教えて頂いた。博士論文の中では未だに十分に応えられていないが、今後研究者としての道を歩んでいくにあたり、このことを常に心がけていきたいと考えている。

英文学関連の学会で浜名先生とご一緒したことも、印象に残る思い出となっている。特に2014年度のシェイクスピア学会では、インドのVikram Chopra先生、ポーランドのKristina Kujawinska先生、アメリカのBryan Reynolds先生と一緒に東京の街を散策した。Bryan先生とは、浜名先生が主催されたシンポジウムの関係で、その後もつくばや東京、はたまた日光江戸村でお会いすることとなった。また、日本だけではなく、高麗大学との共同研究集会や、梨花女子大学での学会 Trading Places: The Changing Climate of English Studies など、韓国の学会でも先生とご一緒し、楽しい時間を過ごした。浜名先生のご紹介を通じて、世界中の研究者と交流することができた。

かつて18世紀ロンドンでは、文学的知性漲る女性が bluestocking を身に着けていた。この言葉は雑誌『青鞥』として明治・大正の日本社会にも継承されていった。鮮やかな青色の足元で筑波大学のキャンパスを歩く浜名先生の姿は、まさに現代の「青鞥」であるとの感を起こさせる。このような尊敬する先生にご鞭撻を賜れたことに、感謝の念でいっぱいである。先生の今後の益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

こぼれ話を

岡和田 晃

早稲田大学を出てから十年間、しばしば肉体労働で糊口をしのぎつつ、2007年からはフリーで文芸評論、SFやロールプレイングゲーム関係のライティング仕事を続けてきた私が、不思議なご縁があって大学院の文芸・言語専攻に入学することとなり、いまだ二年足らず。右も左も、わからないことだらけです。

しかも、うち一年間は学資を稼ぐために休学を余儀なくされたわけですが、そんな身で諸先輩方に混じって浜名先生の思い出を記すというのは、およそ僭越の誹りを免れないでしょう。ですから、ここは皆さまとは違った角度から、浜名先生についてのこぼれ話を語ってみたいと思います。

私が浜名恵美先生のお名前を知ったのは、R・D・オールティックの『ロンドンの見世物』（全3巻、邦訳1990年、国書刊行会）を通してでした。私は入学の何年も前から同書に親しんでいたのですが、翻訳者の方が筑波大学の総合文学で教えておられるとは、思ってもみなかったことをよく憶えています。かの種村季弘氏は『ロンドンの見世物』1巻を評し、「きわめつきはパノラマだ。ロンドン市内、未開地やアルプス高山、大地震、海難、対岸の火事のフランス革命を一望の大パノラマ。この世の果てと世界の終わりを、見世物元祖の教会とは一味ちがった手口でたっぷり見せる」と評しましたが（「だまされて喜ぶ人間」）、けだし慧眼でしょう。上下段に情報がびっしり詰まった蠱惑的な大著に、私自身、とにかく圧倒されたものでした。

大学院に通うようになった2014年の5月、浜名先生が1980年代、英米のSFを研究しかけたということをお教えいただきました。先生の研究室には、アーシュラ・K＝ル・グィン、スタニスワフ・レムといった作家の本格的な研究書、J・G・バラードの『終着の浜辺』に『夢幻会社』の原書、さらにはサミュエル・R・ディレイニーのTRITONなどが並んでいました。知性を感じさせる素晴らしい選定眼。先生が思弁的なSFを通じてジェンダーと社会への考察を掘り下げようと試行錯誤されていた足跡が、垣間見えました。

ちゃんとSFを勉強する人に活用してほしいという先生のご厚意で、私はこれらの資料をそっくりお譲りいただいたのですが、頂戴したご本をよく見ると、そのなかに、『最後の手段 コナン・ドイル未紹介作品集③』（邦訳1983年、中央公論社★NOVELS）が紛れていました。監訳者あとがき（小池滋）を読んで、

びっくり。業績表にはありませんが、浜名先生は本書の翻訳も手がけていらっしゃったのです！

C★NOVELSという新書版小説レーベルははまだ刊行を続けていますが、その「25周年祝賀コメント」にて、翻訳家の風間賢二氏曰く、「創刊時のラインナップを見ると、コナン・ドイル未紹介作品集を刊行するほど斬新かつ特異な叢書だった」。ということは、入学前、私がそれとは意識せずに浜名先生のお仕事に親しんでいたのと同様に、『最後の手段』を通して英文学の醍醐味を知った読者も、少なからず存在するに違いありません。

初期のお仕事との思わぬ邂逅を通じ、先生が手がけられたお仕事の幅広さを噛みしめております。大学を離れられても、先生がいっそう精力的に〈知〉の面白さを発信し続けられるだろうと、私は確信しています。